

高等学 校

平成 31 年度 (2019 年度)

教育研究員研究報告書

保健体育

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究の仮説	3
IV	研究の方法	3
V	研究構想図	5
VI	調査研究	6
VII	授業研究	8
VIII	調査の結果	13
IX	研究の成果と課題	15

研究主題

科目「保健」における評価活動の工夫 ～生涯を通じた健康に向かう資質・能力の育成を目指して～

I 研究主題設定の理由

今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えると予想される。一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される。このような時代にあって、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築できるようにすることが求められている。

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（中央教育審議会 平成 28 年 12 月）において、高等学校学習指導要領（文部科学省 平成 21 年 7 月告示）に基づく保健体育科の課題について、「習得した知識や技能を活用して課題解決することや、学習したことを相手に分かりやすく伝えること等に課題があること、また、健康課題を発見し、主体的に課題解決に取り組む学習が不十分であり。社会の変化に伴う新たな健康課題に対応した教育が必要との指摘がある。」と示されている。

こうした指摘を踏まえて、高等学校学習指導要領（文部科学省 平成 30 年 3 月告示）（以下、「学習指導要領」と表記。）では、知・徳・体にわたる「生きる力」を生徒に育むために「何のために学ぶのか」という各教科等の学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していくことができるようにするため、育成を目指す資質・能力である「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に沿って、全ての教科等の目標や内容を再整理した。これは、資質・能力の育成を目指して「目標に準拠した評価」を実現するための取組でもある。

学習評価に関する基本的な考え方は、「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（文部科学省 平成 28 年）において、「学習状況を分析的にとらえる観点別学習状況の評価と総括的にとらえる評定を、学習指導要領に定める目標に準拠した評価として実施すること」が明確に示されている。

しかし、小・中学校と高等学校とでは取組状況に差があり、高等学校では、知識量のみを問うペーパーテストの結果に偏重した評価が行われているのではないかとの懸念がされている。資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い等といった多様な活動に取り組みせるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である。さらには、総括的な評価のみならず、一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行い、子供たちの資質・能力がどのように伸びているかを、例えば、日々のポートフォリオなどを通じて、子供

たち自身が把握できるようにしていくことも考えられる。学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためにも、学習評価の在り方は重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取組を進めることが求められる。

こうした状況を踏まえ、本研究は、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、生徒の資質・能力の育成に向けて、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の方法を考察した。また、その教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」を働かせることを重視し、次の三つの学びの実現を目指した。

- ①物事の中から問題を見だし、解決方法を探して計画を立て、予測をしながら実行する。
- ②情報を精査し、目的や状況に応じて考えを形成する。
- ③新たな意味や考えを創造する。

以上の学びをより一層活性化するためには、生徒の自己調整が必要不可欠であり、各学習活動に即したルーブリックを作成し、事前に生徒と教師間で共有をする必要があると考えた。

その結果、生徒の健康課題の発見・解決に向けた力は育成され、「保健」が目指す生涯を通じた健康に向かう資質・能力が育成されることが考えられた。

以上のことから、本研究では研究主題を「科目『保健』における評価活動の工夫～生涯を通じた健康に向かう資質・能力の育成を目指して～」とした。

II 研究の視点

保健体育科科目「保健」においては、生涯を通じて健康に向かう資質・能力の向上を目指すために、生徒が個人生活及び社会生活における健康・安全について総合的に理解し、現在及び将来の生活において健康・安全の課題に直面した場合に、的確な思考・判断に基づいて適切な意思決定を行い、自らの健康管理や健康的な生活行動の選択及び健康的な社会生活ができる力の育成が求められている。そのため教師は、生徒が知識を身に付けるだけでなく、習得した知識・技能を活用しながら、自ら課題を発見し、主体的・協働的に探究し、課題解決を図ることができるよう、学びの質や深まりを実現させる授業の展開が求められている。また、これらの学びは、一回一回の授業で全てが実現されるものではなく、単元や内容のまとまりの中で、実現を図るものである。

本研究では、生徒が健康課題を解決するための思考力、判断力、表現力等を育成する学習活動を重視しており、学習活動の過程における評価に視点を定めた。すなわち、①学習活動の見通しを把握するための「評価基準表の事前提示」、②学習活動の到達度の把握のための「自己評価」、③学習活動の到達度の深化のための「相互評価」（以下、①「評価基準表の事前提示」、②「自己評価」、③「相互評価」を評価活動と表記。）、④教師による学習の成果を把握するための「学習評価」に視点を定め、検証授業を実践し、分析・考察を重ねた。また、単元や、生徒の実態に応じて、教師は学習効果が期待できる方法や教材を柔軟に選択しつつ、4～6時間程度の授業のまとまりの中で、段階的・総合的に実現を目指した。

Ⅲ 研究の仮説

研究の視点を踏まえ、本研究における仮説を次のように設定した。

教師と生徒が評価規準を共有し、「主体的・対話的で深い学び」のある授業を展開することで、生徒の健康課題の発見・解決に向けた力を高めることができる。

Ⅳ 研究の方法

1 アンケート調査の実施

高等学校5校に在籍する生徒245名を対象に、同一クラスで評価活動を行った場合と、行わなかった場合の授業前後にアンケートを実施する。

(1) マークシート式アンケート

「問題解決力」、「伝える力」、「先を見通す力」の質問内容8項目について、5段階評価で変容を考察する。

(2) 記述式アンケート（パフォーマンス評価）

単元について、①「自分や社会における問題点にはどんなことがあるか」、②「その問題を解決するにはどんな方法があるか」を記述させ、授業の前後のパフォーマンスの変化を考察する。パフォーマンス評価の信頼性を高めるために、先行研究を参考に、協議を重ね評価を構造化し、ルーブリックを作成した。（表1）

（表1） 本研究が作成したパフォーマンス評価のルーブリック

評価	構造	質問①	質問②
S	$A \Leftrightarrow A'$	（評価Aにいる前提で）Aという問題はあるがそれに対立する問題A'がある。	Aの解決策には、A'という問題があり、なかなか解決策には至っていない。
A	$\begin{array}{c} \text{○} \rightarrow \boxed{a \rightarrow b \Rightarrow c} \rightarrow d \\ \uparrow e \\ \downarrow f \end{array}$	評価Bからさらに発展している。（背景や関係性のある要因）	評価Bからさらに発展している。（具体的な方策、それに伴う別のメリット・デメリットなど）
B	$a \rightarrow b \Rightarrow c$	aが原因でbになり、それがcを招いている。	aによりbとなり、cとなることで解決される。
C	$a \rightarrow b/a, b$	aだからb / aである、bである。	aをbにより解決する。
D	なし	わからない/課題に正対していない記述等	わからない/課題に正対していない記述等

2 検証授業の実施

課程が異なる5校(全日制普通科、全日制普通科(エンカレッジスクール)、全日制商業科、定時制商業科、全日制(単位制)総合学科)で検証授業を実施した。授業の展開は、①基礎的な知識の習得、②課題の設定、③調べ学習、④グループディスカッション、⑤発表する活動の構成で統一した。②課題の設定では、「なぜ」、「どうして」という疑問をもたせ、探究的な学びをスタートさせた。③調べ学習では、様々な手だてで情報収集を行い、集めた情報を整理・分析・思考し、自分の考えとして表現する活動を行った。④グループディスカッションでは、同じテーマの生徒間で意見を共有させることで理解を深め、知識を再構築させた。⑤発表活動では、他のテーマの意見を共有し、批判的な思考や新たな発見をする力を高めることを意識させた。さらに、これらの学習活動に即した以下のルーブリックを作成し、評価活動を実施した。なお、活動に即したルーブリックは、調査の信頼性を高めるために、「学習評価に関する資料」(文部科学省総則・評価特別部会 平成28年1月)の内容を活用した。

調べ学習

- LEVEL 1 与えられた情報を整理できる。
- LEVEL 2 目の前にある課題やその解決のための内容を論理的に掘り下げて考えることができる。
- LEVEL 3 メディアを活用して情報を集め、情報を分析・評価・活用しながら課題を発見したり設定できる。
- LEVEL 4 現実と理想の差を踏まえながら、広い視野・大きなスケールで既知の事実について批判的に考えることができる。
- LEVEL 5 未知のことについても粘り強く考え、自分の考えや常識に捉われずに創造的に考え、新たなアイデアを生み出せる。

グループディスカッション

- LEVEL 1 集団や他者との中で、決められたことや指示されたことに一人で取り組むことができる。
- LEVEL 2 集団や他者との中で、自分の役割を見つけ、個性を活かしながら行動でき、身近なメンバーの支援もできる。
- LEVEL 3 集団や他者との中で、他者の良さに共感し、新たなものを取り入れながら、共通の目標に向かって活動を進めることができる。
- LEVEL 4 集団や他者との中で、互いに良い部分を引き出しながら、win-winの関係を作ることができる。ICTを活用して協働を促進することができる。
- LEVEL 5 文化や国境を越えて、社会を変革する行動に移し、互いに高め合う同志としての関係を作ることができる。

発表

- LEVEL 1 自分の意見や考えを、集団の前で話すことができる。
- LEVEL 2 突然指名された時でも臆せず、集団の前で、自分の意見や考えを相手に伝えるように表現することができる。
- LEVEL 3 ICTを活用したり、データや事例を紹介しながら、自分の意見や考えを相手に伝えることができる。
- LEVEL 4 多様な人々へ、相手の立場や背景を考えながら分かりやすく伝えることができる。
- LEVEL 5 多様な人々へ、熱意とストーリーをもって腑に落ちる形で説得力ある発信を行い、共感を得ることができる。

3 ワークシートの工夫

ワークシートに調べ学習、グループディスカッション、発表する活動のルーブリックを提示し、生徒と共有することで、生徒が自己評価や自己調整を行いながら学習することをねらいとした。調べ学習後にはワークシートを回収し、記述内容を教師がフィードバックすることで、生徒の学習状況の把握や教師の授業改善につなげた。ワークシートを活用し、学習のフィードバック、自己評価、相互評価を繰り返すことで学習の振り返りが可能となり、深い学びにつながるとともに、生徒が主体的に自己に向き合うことをねらいとした。

V 研究構想図

共通テーマ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

◀「保健」の目標▶

保健の見方・考え方を働かせ、合理的、計画的な解決に向けた学習過程を通して、生涯を通じて人々が自らの健康や環境を適切に管理し、改善していくための資質・能力を次のとおり育成する。

- (1) 個人及び社会生活における健康・安全について理解を深めるとともに、技能を身に付けるようにする。
- (2) 健康についての自他や社会の課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けて思考し判断するとともに、目的や状況に応じて他者に伝える力を養う。
- (3) 生涯を通じて自他の健康の保持増進やそれを支える環境づくりを目指し、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を養う。

◀現状と課題▶

健康課題を発見し、主体的に問題解決に取り組む学習が不十分であり、社会の変化に伴う新たな健康課題に対応した教育が必要である。そのため、特に以下の二点において、授業改善が求められる。

- ・生徒が習得した知識や技能を活用して課題解決する力を授業において育成すること。
- ・生徒が学習したことを相手に分かりやすく伝える力を授業において育成すること。

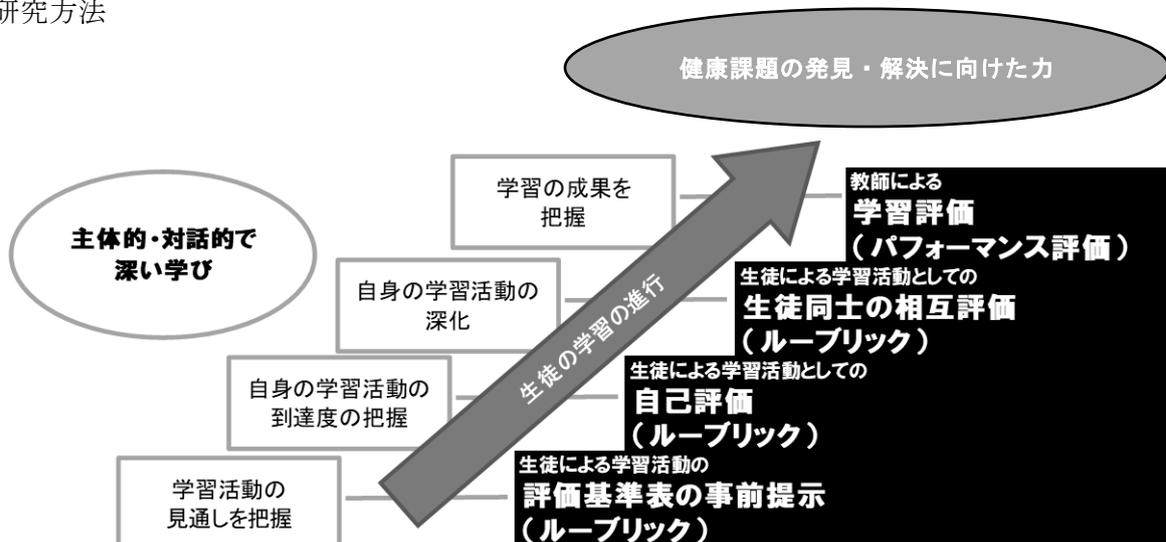
研究主題

科目「保健」における評価活動の工夫
～生涯を通じた健康に向かう資質・能力の育成を目指して～

○研究の仮説

教師と生徒が評価規準を共有し、「主体的・対話的で深い学び」のある授業を展開することで、生徒の健康課題の発見・解決に向けた力を高めることができる。

○研究方法



生徒の学習の進行の中で、ルーブリックを用いた①評価基準表の事前提示、②自己評価、③生徒同士の相互評価、④教師による学習評価を行うことで、健康課題の発見・解決に向けた力が向上し、生涯にわたって健康を保持増進する資質・能力が育成される。

○検証方法

- ①生徒が主体的・対話的で深い学びを実践できるように、単元指導計画やワークシートを作成し、検証授業を行う。
- ②アンケート調査や授業実践データ（生徒の発言、ワークシートの記述内容など）を分析し、検証・考察する。

VI 調査研究

1 調査のねらい

本研究では、研究構想図に記載された科目保健の現状と課題を踏まえ、保健の「見方・考え方」を働かせることを重視し、①物事の中から問題を見だし、解決方法を探して計画を立て、予測をしながら実行する。②情報を精査し、目的や状況に応じて考えを形成する。③新たな意味や考えを創造する。これらの三つの学びの実現を目指して「主体的・対話的で深い学び」のある授業を実施する。そして、教師と生徒が評価規準を共有し授業を展開することで、生徒の健康課題の発見・解決に向けた力を高めることができるという仮説を探索的に検討することを目的とする。

2 調査内容

(1) 調査対象者

調査対象は、都立高等学校5校（全日制普通科、全日制総合学科、全日制商業高校、全日制エンカレッジスクール、定時制商業高校）であった。それぞれの学校に在籍する2年生175名、1年生70名、合計245名であった。

(2) 質問紙の尺度構成

生徒の健康課題の発見・解決に向けた力の育成を測定するために、質問紙による調査を実施した。構成は、1～4を「問題解決能力」、5～7を「伝える力」、8を「先を見通す力」とし、合計8項目を作成した。各質問項目の評定は、「1：全く当てはまらない」から「5：非常に当てはまる」までの5段階で回答を求めた（表2）。

（表2） 質問紙調査解答用紙

		全く当てはまらない	当てはまらない	どちらともいえない	当てはまる	非常に当てはまる
	これから学習活動についていくつか質問をします。正直に、思った通りに答え、自分があてはまるものにマークをしてください。 なお、保健の成績とは関係ありません。					
1	これまでの学びや活動の中で出会ったテーマについて、調べたいことを自分の力で見つけることができる	①	②	③	④	⑤
2	これまでの学びや活動の中で出された課題や問題に関し、それを調べる方法を自分で見つけて調べることができる	①	②	③	④	⑤
3	これまでの学びや活動の中で出された課題や問題に対し、目標達成の方法や答えの中から一番よい方法を選ぶことができる	①	②	③	④	⑤
4	これまでの学びや活動の中で出された課題や問題に対し、自分独自の考えややり方、答えなどを発想できる	①	②	③	④	⑤
5	これまでの学びや活動において、自分の意見や調べたことなどを文章に書く際に、「なぜそう思うのか」「どうしてそうなのか」などの理由と一緒に説明することができる	①	②	③	④	⑤
6	これまでの学びや活動において、自分の意見や調べたことなどを他の人や先生に口頭で説明する際に、「なぜそう思うのか」「どうしてそうなのか」などの理由と一緒に説明することができる	①	②	③	④	⑤
7	これまでの学びや活動において、自分の考えたことや調べたことなどを他の人や先生に伝える際に、「分かりやすくする工夫」（図、写真、実演等）をすることができる	①	②	③	④	⑤
8	これまでの学びや活動の中で、「この方法はうまくいく」「この方法では失敗する」のように、何をどうすればうまくいくのかを予想して、行動することができる	①	②	③	④	⑤

(3) 自由記述

尺度による質問に加え、質問項目の効果測定を補うことを目的とし、自由記述による項目を質問紙に記載し下記の二つの問いについて解答を求めた。

①「(単元名) について、自分や社会における問題点にはどのようなことがありますか。具体例を示して書いてください。」(以下、「質問①」と表示)

②「その問題を解決するにはどんな方法がありますか。具体例を示して書いてください。」(以下、「質問②」と表示)

(4) 実施方法

評価活動の有無でどのような差が出るかを見取るため、同一クラスで評価活動を実施しない授業と評価活動を実施する授業(以下、評価活動を実施しない授業を「A」、評価活動を実施した授業を「B」と表記。)を別の単元で行い、単元の内容のまとまりの初めと終わりに質問紙調査を実施した。調査の実施時間は約10分間である。調査の各ポイントの平均を求め、事前・事後の平均点の推移より分析した。また、事後調査は文末を「できる」から「できるようになった」とし、生徒の変化を見た。

3 調査研究前の生徒の実態

(表3) 各質問項目における事前データの回答別人数(%)と回答の平均値

	問題解決能力				伝える力			先を見通す力
	質問1	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	質問8
全く当てはまらない (1点)	2.6%	1.8%	3.5%	3.9%	3.9%	6.6%	5.3%	3.5%
当てはまらない (2点)	13.0%	10.5%	9.2%	15.2%	22.3%	21.2%	25.2%	10.1%
どちらとも言えない (3点)	48.3%	36.4%	53.5%	42.6%	43.2%	44.7%	46.0%	49.3%
当てはまる (4点)	29.6%	43.4%	30.7%	32.6%	26.6%	23.0%	18.1%	33.0%
非常に当てはまる (5点)	6.5%	7.9%	3.1%	5.7%	3.9%	4.4%	5.3%	4.0%
平均値	3.24	3.45	3.21	3.21	3.04	2.97	2.93	3.24

(表4) 自由記述の評価別人数(%)と回答の平均値

	S(5点)	A(4点)	B(3点)	C(2点)	D(1点)	平均値
質問①	0%	1%	11%	67%	21%	1.91
質問②	0%	0%	14%	58%	28%	1.85

(表3)より、どの質問項目についても、「全く当てはまらない」と「非常に当てはまる」に回答した生徒の割合が少ないことが示された。各項目を得点化した平均値では、おおむね3ポイント台であった。

(表4)については、自由記述の質問①及び質問②において、「C」と「D」の評価が非常に多く全体の約80%以上であった。

VII 授業研究

1 検証授業

実践事例

(1) 単元名 保健 生涯を通じる健康 (イ) 労働と健康

(2) 単元の目標

ア 生涯を通じる健康について、自他や社会の課題を発見し、その解決を目指した活動を通して、労働災害の防止には、労働環境の変化に起因する傷害や職業病などを踏まえた適切な健康管理及び安全管理をする必要を理解できるようにする。

イ 生涯を通じる健康に関する情報から課題を発見し、健康に関する原則や概念に着目して解決の方法を思考し判断するとともに、それらを表現することができるようにする。

ウ 生涯を通じて自他の健康の保持増進やそれを支える環境づくりを目指し、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を身に付けることができるようにする。

(3) 単元の評価規準

	ア 知識	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準	生涯を通じる健康について、自他や社会の課題を発見し、その解決を目指した活動を通して、障害を通じる健康について理解を深めることができる。	生涯を通じる健康に関する情報から課題を発見し、健康に関する原則や概念に着目して解決の方法を思考し判断するとともに、それらを表現することができる。	生涯を通じる健康について、生涯を通じた健康の保持増進には、労働と健康に関する活動や対策が重要であることに興味をもち、学習活動に意欲的に取り組もうとしている。
学習活動に即した評価規準	労働災害は、作業形態や作業環境の変化に伴い変化してきていることや働く人の健康は、安全管理・心身両面にわたる総合的な対策の推進により成り立っていることを理解している。	労働災害や働く人の健康について、習得した知識を基に、生活の改善に向け、個人の取組と社会的対策を整理し、課題解決の方法に応用している。	労働災害や働く人の健康について、関連する資料を探したり、見たり、読んだり、課題の解決に向けての話合いや意見交換するなどの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。

(4) 年間指導計画における位置付け

		1 学期	2 学期	3 学期
1 単位	第 2 学年	生涯を通じる健康	生涯を通じる健康/ 健康を支える環境づくり	健康を支える環境づくり
		<u>生涯を通じる健康</u> (ア) 生涯の各段階における健康 ⑦思春期と健康 ①結婚生活と健康 ⑦加齢と健康	(イ) 労働と健康 ⑦労働災害と健康 ①働く人の健康の保持増進 <u>健康を支える環境づくり</u> (ア) 環境と健康 ⑦環境の汚染と健康 ①環境と健康に関わる対策 ⑦環境衛生に関わる活動 (イ) 食品と健康 ⑦食品の安全性 ①食品衛生に関わる活動	(ウ) 保健・医療制度及び地域の保健・医療機関 ⑦我が国の保健・医療制度 ①地域の保健・医療機関の活用 ⑦医薬品の制度とその活用 (エ) 様々な保健活動や社会的対策 (オ) 健康に関する環境づくりと社会参加

(5) 「(イ) 労働と健康」の指導計画と評価計画

	時間	第1時	第2時	第3時(本時)
	目標	<ul style="list-style-type: none"> 労働による傷害や職業病などの労働災害は、作業形態や作業環境の変化に伴い質や量に変化してきたことを理解する。また、労働災害を防止するには、作業形態や作業環境の改善を含む健康管理と安全管理が必要であることを理解する。 労働について、現代ではどのような課題や現状があるかを、積極的に調べることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 働く人の健康の保持増進は、職場の健康管理や安全管理と共に、心身両面にわたる総合的、積極的な対策の推進が図られることで成り立つことを理解する。 事例の中から、解決方法を挙げ、個人と社会で取り組まなくてはならないことについて分類することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 働く人の健康の保持増進について、自身や社会の課題について解決方法などを説明することができる。 他者評価・自己評価の活動から、自身の課題を挙げることができる。
学習の流れ	導入	「働くことと健康」、「労働災害と健康」を読み、ポイントをまとめる。	「健康的な職業生活」を読み、ポイントをまとめる。	前回までの学習を振り返り、発表の準備を行う。
	展開	<p>I 調べ学習(ジグソー法)</p> 労働と健康について、ニュースや文献から関連した情報を見つけ出す。一つの事例を決めて、その事件について掘り下げて調べる。 *保護者の労働について、健康の観点から話を聞く。	<p>I グループディスカッション</p> 関連情報から課題を発見し、解決方法を挙げるとともに自身でできることと社会が取り組むべきことを分類する。 <p>II 発表準備</p> 次回、他の生徒に説明する準備をワークシートを用いて行う。	<p>I 発表(ジグソー法)</p> 事例を挙げ、その解決方法や対策について、前に出てクラスに発表する。 <p>II 発表の評価</p> 発表をしたグループ同士による相互評価を行う。自身の発表についても評価を行う。
	まとめ	学習への自己評価及び振り返りを行う。調べたことについて、ノートにその詳細を記述する。	学習への自己評価及び振り返りを行う。	学習への自己評価及び振り返りを行う。働く人の健康の保持増進についての課題を、自身でまとめる。
評価の機会	知	ア(観察・ノート)		
	思			イ(課題)
	学		ウ(観察・ワークシート)	

(6) 指導の工夫

ア 「主体的・対話的で深い学び」としてジグソー法とグループディスカッションを用いる。様々な課題に直面している「労働」について、五つの事例を取り上げ、それぞれの課題や解決方法についてグループで協働しながら、他者に分かりやすく伝えることができるよう内容をまとめていく。

イ 「労働と健康」については、高校生にはイメージをもちにくく、当事者意識が低い状態からの学習となるため、ケースメソッドを用いて、複数のケースから労働が健康に脅かす危険性を理解しながら学習に取り組めるよう展開する。

(7) 本時（計3時間中の3時間目）

ア 本時の目標

(7) 働く人の健康の保持増進について、自身や社会の課題について解決方法や予防方法など自身が取り組めることと社会で取り組んでいくことなどを説明することができる。

(イ) 他者評価・自己評価の活動から、自身の課題を挙げることができる。

イ 本時の展開

時	学習内容・学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価方法
導入 10分	<p>①挨拶・出欠確認 ②前回までの復習</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 労働災害の防止には、労働環境の変化に起因する傷害や職業病などを踏まえた適切な健康管理及び安全管理をする必要があることを確認する。 </div> <p>③発表準備 ループリックの把握 (ワークシートに記載)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を受ける体制を整えさせる。 ・発表原稿も併せて用意させる。 <ul style="list-style-type: none"> ・全ての事例が組み合わさるように席を変更させる。5人グループ×8グループ ・ワークシートを参考に、「発表」に対するループリックを読み上げさせる。 	
展開 30分	<p>④発表</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> A コンビニの24時間営業問題 B 過労死とメンタルヘルス問題 C アスベスト労働環境問題 D 配達業者の時間指定の変更に関する問題 E 働き方改革問題 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0; text-align: center;"> × </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> ワークシート ①概要 ②背景や経緯 ③課題 ④解決策 ⑤自分の意見 ※発表に必要な項目枠を用意し、そのまま発表原稿となるようにデザインする。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> A：人員不足と労働時間について考え、責任者の労働が強制的に働くケースから、健康と業務との優先順位を的確に捉える。 B：メンタルヘルスケアについて考える。心身の健康を維持するためのライフワークバランスを考える。 C：アスベストを例に労働者の環境は果たして安全であるのか。会社は何を優先して守るべきか、どのように守るかを考える。 D：行き過ぎたサービスや労働者への過度な負担を社会の変化からも見直す機会に。配達業者が抱える責任を考える。 E：なぜ労働者は労働するのか。なぜ休まないのか。実際の働く人の意識を捉える。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・1人あたり5分程度で、班内に発表させる。聞き手は自身のノートにメモと発表者に対する評価を記入させる。 	
	<p>⑤質疑応答</p> <p>⑥講評</p> <p>⑦相互評価の確認</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒からの質問に対して、発表者が答えられない場合は、教員から助言・指導をする。 ・それぞれのケースがもつ課題の難しさについて考えられるようにさせる。 ・発表活動のよかった点、改善点などをいくつか説明し、フィードバックさせる。 ・ループリックを参考に、①それぞれの発表者の評価を行わせる。また、②自分たちのグループへの評価を行わせ、自身の取り組みを振り返らせる。 	

まとめ 10分	<p>⑧課題 「働く人の健康の保持増進について、①自他及び社会の課題を挙げなさい。②その課題について自身及び社会でできることについて説明しなさい」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ノートに「課題」と「自身の解答」を記述させる。 ・課題に対し、できる限り詳細に、具体的に記述させる。 ・本時の発表の視点や親の労働と関連させたり、自身のアルバイト経験や将来の仕事と関連させて記述できるようにアドバイスをする。 ・個人でできることと社会で取り組むべきものと分けて記述させる。 	イ (課題)
------------	---	--	-----------

(8) 実際に授業で用いた自由記述による質問（課題）

- ①「労働と健康について、自分や社会における問題点にはどのようなことがありますか。具体例を示して書いてください。」
- ②「その問題を解決するにはどんな方法がありますか。具体例を示して書いてください。」

(9) パフォーマンス評価のルーブリックに基づく模範解答例

評価	構造	質問①	質問②
S	$A \Leftrightarrow A'$	<p>(評価Aの記述) という問題はあるが、<u>A {a 会社が発展するには利益を追求しなくてはいけないため、b 人件費等の経費削減を余儀なくされており、c 人材確保が難しくかったり、d サービス残業を強いられ</u>たりする} といった問題もあり、解決に至っていないのだろう。</p>	<p>(評価Aの記述) のような解決策があるが、<u>A {a 給料を上げることで b 人件費はかきみ、企業が利益を増やすには c 商品を値上げしなくてはいけなくなり、d 売り上げが落ちることが見込まれる。企業の利益追求という考え方からも給料を上げて従業員を増やすことは現実的に厳しい}</u> という問題があり、解決策が実行できない。</p>
A		<p><u>a 人手不足が原因で b 過重労働になり、それが c 精神疾患を招き、最悪の場合 d 自殺に追い込まれる。</u></p>	<p><u>a 給料を上げるとより b 優秀な人材が増え、c 1人当たりの仕事量が減る。それにより d 残業時間等が改善され、e 従業員の肉体的・精神的負担は減り、f 作業能率も上がる。</u></p>
B	$a \rightarrow b \Rightarrow c$	<p><u>a 人手不足が原因で b 過重労働になり、c 自殺を招いている。</u></p>	<p><u>a 給料を上げるとより b 優秀な従業員が増え、c 1人当たりの仕事量が減る。</u></p>
C	$a \rightarrow b/a, b$	<p><u>a 過重労働が問題である。</u></p>	<p><u>a バイトを増やすと b 1人当たりの仕事量が減る。</u></p>
D	なし	<p>分からない。(課題に正対していない記述等)</p>	<p>分からない。(課題に正対していない記述等)</p>

発表に向けて、必要な情報を集めよう！

発表に向けて、情報を整理しよう！

テーマ

① ニュースの概要

与えられたニュース記事に対して、キーワードを複数挙げて、伝わりやすくまとめさせる。ここでは事実がしっかりと要約して記入するよう、適宜アドバイスをしながら取り組ませる。場合によっては、教員が概略を解説し、労働に対して示すべき態度や会社が行わなければならないことなどイメージできるようにする。

関連ニュース

ここではPC等を用いて、関連したニュースをもう一つ見付け出し、違う側面からニュースを捉えさせる。また、「フランチャイズ」や「労働基準法」等、あまり中身を知らないキーワード等も調べ、ここに記述する。

② 背景や経緯

この欄には、このニュースが起きた背景や経緯を記入する。表立ってニュースに記載されていないケースもあるが、この流れに触れ、問題が起きる原因や要因に迫る。

③ 問題点・課題

- ニュースの問題点に要点を絞って、項目を立てる。様々な観点から、課題に気付くことができるようにする。また、その問題に付随する逆の立場からの問題点にも触れられるようにする。
-

④ 解決方法・解決策

③で挙げた問題点に対する解決方法を考えて記入する。また、その解決策が現在取り組まれている理由等があればそれについても触れられるように取り組む。
※右の表はこれら①～④を記入する際に、ヒントとなる要素として載せている。

	出来事・事象	状況・条件	選択	人	理由・要因	手段
現在	どういうことか	状況・条件は明確か	どんな選択肢があるか	誰がしているのか	なぜそうなっているか	どのようにすればそうなるか
過去	かつてはどうかだったか	状況・条件は変わっていないか	どんな選択肢の中からこうなったか	誰がしたのか	なぜ変わったのか	どのようにしてそうなったか
可能性	変わる可能性があるか	状況・条件が変わる可能性があるか	他の可能性はあるか	関係者が変わる可能性があるか	どんな理由があり得るか	どんな手段があり得るか
予想	どうなるか予想するか	状況・条件がどう変わると予想するか	他を選択したらどうなるか	誰が変わると予想するか	理由・要因はどうか予想するか	他の手段をどうとどうなるか
仮定	もし～になったらどうか	状況・条件が～になるとどうか	もし～を選択したらどうか	関係者が変わるとどうか	もし～が理由・要因ならどうか	～のようにしたらどうか
意図	どうしたいのか	状況・条件についてどうしたいか	どれを選択したいか	誰異を関係させたいか	なぜそうしたいのか	どのようにしたいのか

⑤ 自分の意見

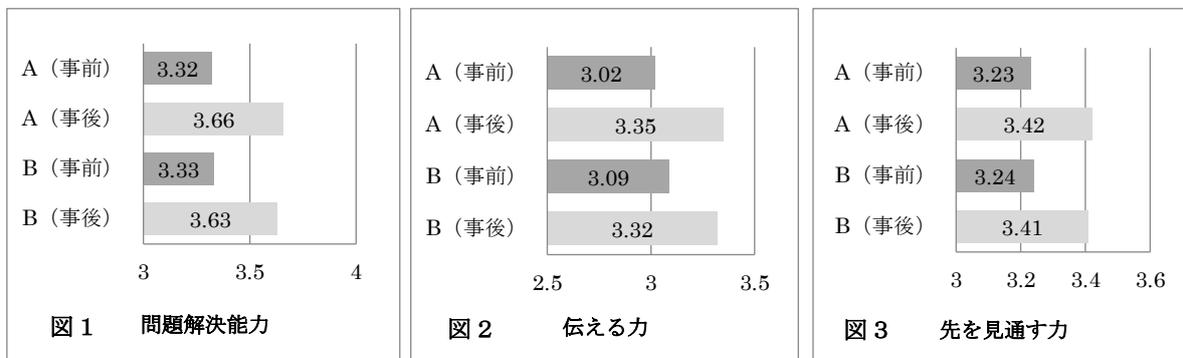
発表

- LEVEL 1 自分の意見や考えを、集団の前で話すことができる。
- LEVEL 2 突然指名された時でも臆せず、集団の前で自分の意見や考えを相手に伝えるように表現することができる。
- LEVEL 3 ICTを活用したり、データや事例を紹介しながら、自分の意見や考えを相手に伝えることができる。
- LEVEL 4 多様な人々へ、相手の立場や背景を考えながら分かりやすく伝えることができる。
- LEVEL 5 多様な人々へ、熱意とストーリーをもって腑に落ちる形で説得力ある発信を行い共感を得ることができる。

VIII 調査の結果

1 質問紙調査

質問紙調査については、(表3)の8項目の質問のうち、1～4を「問題解決能力」、5～7を「伝える力」、8を「先を見通す力」としてまとまりの変化を分析した。(図1～3)それぞれ事前・事後でポイントが上昇したものの、大きな違いは見られなかった。

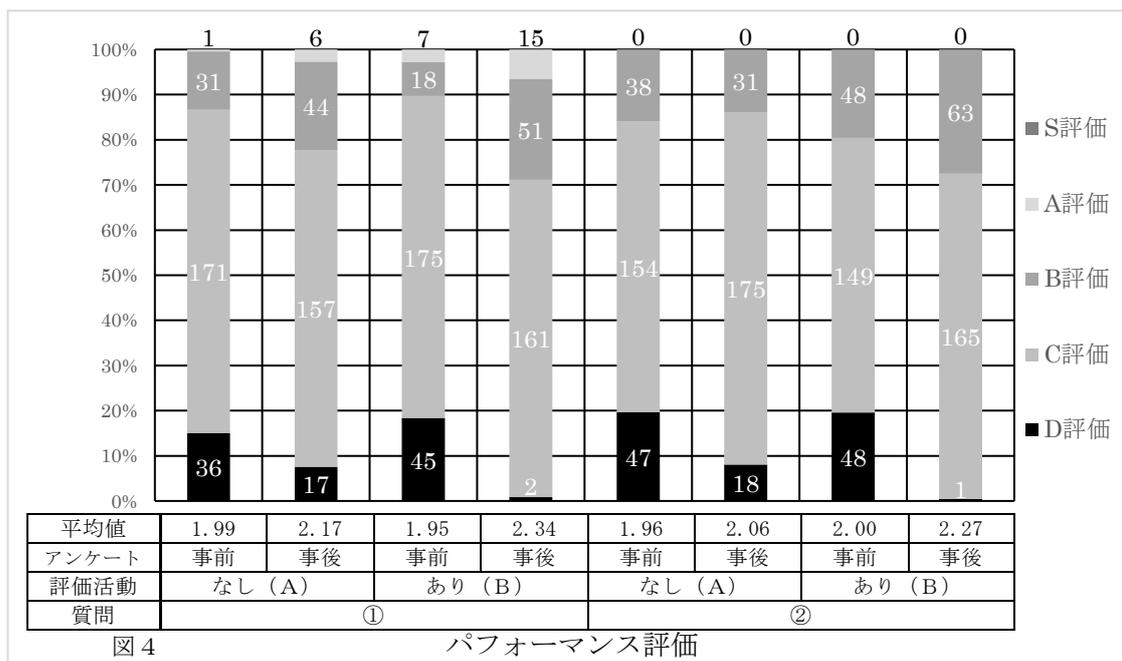


評価活動を実施することは、有効であると思われるが、一单元において比較したため、評価活動による変容が十分に引き出せなかったのではないかと考える。「問題解決能力」、「伝える力」、「先を見通す力」の育成と関係していないということではなく、自分で調べて発表するという形式の授業を積み重ねていった結果、理解が深まり、生徒が自己と向き合って自己を振り返ることができたのではないかと考察した。

課題として、Bの事前調査はAの事後調査の翌週に同じ内容の質問紙調査を実施したため、生徒の変容を促す時間を確保することができなかったことや、アンケートの実施時間が挙げられた。

2 パフォーマンス評価

(1) 平均点と評価分布の分析



パフォーマンス評価については、(表1)のルーブリックを用いて、A、Bそれぞれの事前事後で自由記述を5段階で評価した。A、Bそれぞれの事前事後の平均点の差をみると、質問①A(0.19ポイント)、質問①B(0.40ポイント)、質問②A(0.10ポイント)、質問②B(0.27ポイント)の差が確認された(図4)。また、評価分布をみると、質問①の問題提起の部分で、D評価の人数が0に近付いていることがわかる(図4)。このことから、思考力、判断力、表現力等に努力を要する生徒に対して、ルーブリックを共有し評価活動を行うことが、有効な支援となったことが考えられる。しかし、問題解決の部分の質問②は、S・A評価の上位層の増加が全くみられなかった。思考力、判断力、表現力等を高めるためには、4～6時間のまとまりを2サイクルするだけでは、十分に引き出せないと考える。

今後は、入学年次から二か年に及ぶ保健を大きな一つのまとまりとして捉え、主体的・対話的で深い学びのある学習の実現に向けて、意図的・計画的に単元指導計画や年間指導計画を作成し、根気強く繰り返しながら学習を行う必要がある。

(2) 記述内容の分析

検証授業が進むにつれて、多くの生徒が複数の解決策を記述するようになった。しかし、本研究における課題のリストアップは、複数構造的で浅い学びであると定義付けているため、B評価が多くなる結果となっている。(表5)はある生徒の記述を追跡して表にまとめたものである。前述のルーブリックと照らし合わせると、「環境と健康」でAの授業を実施した後の記述(A事後)は、答えが複数構造的であるが、根拠や背景がなく述べられているためB評価である。一方、「労働と健康」でBの授業を実施した後の記述(B事後)では、ある問題から分析、予想、特徴付けがなされ、「その問題がさらにどのように発展しているか」と生徒が理解できていることが分かるため、A評価とした。

(表5)	質問①		
	単元	評価	記述
A(事前)	健康 環境と	C	大気汚染で人体への影響がある。
A(事後)		B	温室効果ガスが増え、気温が上昇している問題がある。 具体的には、伝染病が拡大、海面上昇し国がなくなりそう、台風が発達して上陸してくるなど、様々なことが起こっているということである。
B(事前)	健康 労働と	C	働いている人が働きすぎて体を壊してしまう。具体的には過労死など。
B(事後)		A	今日発表してもらった話の中に人手不足という問題点が数多く上がっていた。 働く人が少ないから一人の負担が増え、その結果、過労死などにつながっているのだと思う。他の会社でも同じような問題を抱えているところも多いと思う。

しかし、このように発展的に学びが深まった生徒は少数であった。A(事後)を例に考えれば、「地球温暖化の問題では、{(a)温室効果ガスが増えることにより、(b)気温が上昇し、そのことで(c)南極大陸の氷が融解し、(d)海面上昇が起こり、国が水没したりと大きな影響を及ぼすそれがある。}」(a、b、c、dはそれぞれ表1の構造の記号を表している)という記述に変えると、A評価の構造に変化する。学習を重ねていき、解決策のルーブリックを示していけば、A評価に達するだけの情報を整理することができる生徒は増えるだろうと考察した。

Ⅸ 研究の成果と課題

本研究では、教師と生徒が評価規準を共有し、「主体的・対話的で深い学び」の授業を展開することで、生徒の健康課題の発見・解決に向けた力を高めることができると考えた。

検証授業に向けて、単元や題材のまとまりを見通して、4～6時間の単元指導計画を作成し、「①物事の中から問題を見だし、解決方法を探して計画を立て、予測をしながら実行する。②情報を精査し目的や状況に応じて考えを形成する。③新たな意味や考えを想像する。」の三つの学びの実現を目指した。なお、単元や題材の内容や、学校や生徒の実態に応じて、教師は学習効果が期待できる方法や教材を柔軟に選択した。また、各学習活動に即したルーブリックを作成し、事前に生徒と教師間で共有を図った。その上で、授業のまとめでは、提示したルーブリックに基づき、各学習活動に応じて自己・相互・教員間のいずれかの方法で評価活動を行った。これらの評価活動の有効性を立証するために、同一校の同一クラスで「評価活動を行った場合」と、「評価活動を行わなかった場合」の2パターンで検証授業を実施し、その前後でアンケート調査を実施した。アンケートは、「問題解決能力」、「伝える力」、「先を見通す力」に関する質問調査による量的調査と、思考力、判断力、表現力等を測るパフォーマンス評価による質的調査の二部構成で実施した。

1 生涯を通じた健康に向かう資質・能力の育成

検証授業は、課程が異なる5校で実施したが、いずれも生徒は意欲的に活動する様子が見受けられた。特に「調べる」ということを通して、物事の問題点を考え、その背景や根拠、これまでの経緯を考えて調べることができていた。「発表する」という点についても、他者に伝えるためにはどうしたらよいかをよく考え、内容を精査し、伝わりやすい言葉をよく考え、工夫して発表することができていた。また、これまで学習に消極的であった生徒も、主体的に活動している様子を見ることができた。パフォーマンス評価の記述分析では、健康についての自他や社会の課題を発見し、よりよい解決に向けて思考できている記述が多く見られる結果となった。このことから、教師と生徒が事前に評価規準を共有することで、生徒はよりレベルの高い目標を目指し、自己調整しながら学習活動を展開することにつながり、生徒の健康課題の発見・解決に向けた力を高めることができたと考察する。特に、D層の記述が減り、B層の記述が増加していることから、思考力、判断力、表現力等に努力を要する生徒に対して、ルーブリックを共有し評価活動を行うことが、有効な支援となることが考えられる。また、各学習活動で使用したワークシートを回収し、生徒の記述や評価活動の結果等を確認することで、教師が生徒の学習状況をより丁寧に把握し、授業改善に生かすことができた。

課題としては、今回、評価活動の有無がパフォーマンス評価に与える影響は、質問①Bで0.4ポイント、質問②Bで0.27ポイントしか差が見られず、改善までには至っていない。その要因の一つに、評価の妥当性を確立することが出来ず、パフォーマンス評価に関する評価規準を、生徒と教師が共有できなかったことが挙げられる。学習活動に即したルーブリックと同様に、思考力、判断力、表現力等を働かせた論述の目指すべき在り方を想定させることができれば、生徒は理解した知識を結び付け、筋道を立てて説明することが可能となり、高い評価水準に到達できたのではないかと考える。さらに、パフォーマンス評価の結果を、生

徒へ適切にフィードバックをするなど、単元や題材のまとまりごとに PDCA サイクルを機能させる必要があった。

また、パフォーマンス評価の質問②は、評価活動の有無にかかわらず、S・A層の増加が全くみられなかった。これは、より高次の思考力、判断力、表現力等を身に付けるためには、4～6時間のまとまりを2サイクルするだけでは、授業時数が足りなかったことが考えられる。したがって、今後は入学年次から2年に及ぶ保健の授業を、大きな一つのまとまりとして捉え、主体的・対話的で深い学びのある学習の実現に向けて、意図的・計画的に単元指導計画や年間指導計画を作成し、根気強く繰り返しながら学習を行う必要がある。

2 ルーブリックを使用した評価活動の意義

思考力、判断力、表現力等が向上した結果、パフォーマンスはどのように変化するのかを構造的に捉え、整理することで、ルーブリックの汎用性を高めることができた。そのため、扱う単元や題材が異なる場合でも、共通の尺度で生徒を評価することができた。また、パフォーマンス評価に限らず、今回使用したルーブリックは全て、学習活動に着目して作成されているため、学校全体で共通したルーブリックを使用し、教科横断的に評価活動を行うことができ、生徒の資質・能力の育成につながると考える。さらに、自由記述から思考力、判断力、表現力等の状態を評価できることから、定期考査等の設問の一つとして出題することで、観点別評価に転用することが可能であり、指導と評価の一体化を図ることができると考える。

しかし、パフォーマンス評価の記述の中には、想定した構造や具体例に当てはまらない回答も複数存在した。そのため、それらをどのように評価するべきか、何度も協議を重ねる必要があり、構造的に思考力、判断力、表現力等を評価することの難しさを痛感した。

今後、学校全体でルーブリックを共有し、教科横断的に評価活動を行う場合は、評価方法について、事前に教師同士で検討し共有する必要がある。また、評価に関する実践事例を蓄積し、評価についての校内研修等で教師の評価に関する力量の向上を図るなど、学校として組織的かつ計画的に取り組む必要がある。

本来、評価活動は、生徒の学習活動を活性化させ、資質・能力を伸長するための手段であり、目的ではない。そのことを理解しないまま、評価活動が主活動となり、学習展開されることがないように注意が必要である。

【参考文献】

- 「高等学校学習指導要領」(文部科学省 平成30年3月)
- 「高等学校学習指導要領 総則編、保健体育編 体育編」(文部科学省 平成30年7月)
- 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について(答申)」(中央教育審議会 平成28年12月21日)
- 「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」(文部科学省 平成31年1月)
- 「『OECDとの共同による次世代対応型指導モデルの研究開発』プロジェクト 平成27年～29年度研究活動最終報告書」(東京学芸大学次世代教育研究推進機構 平成31年3月27日)

平成 31 年度(2019 年度) 教育研究員名簿

高等学校・保健体育

学 校 名	職 名	氏 名
東京都立葛飾商業高等学校	主幹教諭	江 原 ミナ子
東京都立つばさ総合高校	教 諭	加 藤 景 子
東京都立第五商業高等学校	教 諭	◎前 川 達 郎
東京都立東大和高等学校	主任教諭	佐 藤 浩 太
東京都立東村山高等学校	教 諭	岩 瀬 陸 斗

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部指導企画課

指導主事 濱島 浩二

平成 31 年度 (2019 年度)
教育研究員研究報告書
高等学校・保健体育

令和 2 年 3 月

編 集 東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849